

# 真夏の花

——俺に、千夏をください。



心が溢れそうになったら、前歯を閉じ唇を引き締める。  
舌の付け根に力をこめれば押しこめるのは簡単だ。

——好きだ、千夏。

その一言さえ零さなければ何とかなる。

「今日の帰りのうどん、冷たい温玉と、かけにちくわの天ぷら。どっちだと思う？」

前の席から振り返って千夏が訊く。

千夏を見て、初めて人が食事をする風景を「おいしそうだ」と実感したことを木ノ下蒼司は覚えている。

初めはご近所から買ったというゆでたてのトウモロコシに白い歯を立てたときだった。千夏が食べると何でもおいしそうだ。蒼司がクリスマスマスに家族で行った夜景の見えるホテルのレストランや、前の学校の高校合格祝いに連れていかれた料亭よりも、古い木の小屋の窓からもんと湯気を出し、作業服の人たちの列に並んで、ドラム缶の上で食べるうどんがおいしいと思っただ。それが一人で食べると別においしくないから不思議だ。

千夏のせいだとすぐにわかった。旨い旨いと繰り返すわけではない。同じものを食べていても「おいしそうだな」と思う千夏の食事風景だった。だから千夏と何かを食べに行くのが好きだ。

学校帰りにあるうどん屋が自分たちの行きつけだ。入り口でかけか冷やかを選ぶ。流れ作業でどんぶりを受け取り、自分でつゆをかけトッピングを選んでうどんののせて、レジの女性に見せると何も言わずに

尾上与一 画 / 黒沢要

「二月病」より

値段だけ告げられる。ちなみにうどんが百三十円、天ぷら類が五十円でたまごが三十円。二百円あればおなかに溜<sup>た</sup>まるし、五十円出せば替え玉ができる。

「……暑いから冷たいのに温玉」

下敷きでばたばた扇いでいる千夏の夏服の襟の中から、目を逸<sup>そ</sup>らしながら蒼司は応<sup>こた</sup>えた。胸の桐井<sup>きりい</sup>というネームに目が留まる。

新鮮たまごの黄身を絡めて食べる派と温玉派があるが、千夏は温玉派のようだった。蒼司もそれには同意する。

氷水でしめたゆでたてのうどんに温玉。たっぷりの小葱<sup>こねぎ</sup>の上で、温玉をとろりと割る。蒼司はそれにしようと思っっている。

「かけにちくわも捨てがたい」

「じゃあ、冷たいのにちくわをのせたら？」

「いや、ちくわはつゆに浸<sup>ひ</sup>かかってこそちくわだろう？ 暑い、って言いながら食べるのも捨てがたいわけで。

その場合はかけにちくわ一択だろう？」

「そうなんだ……」

うどんで有名な土地だ。転校してきてから丁度一年。ずいぶんうどんとの付き合い方は慣れてきたつもりだが、未<sup>いま</sup>だに千夏の好みが把握<sup>とら</sup>えきれない。

「よし決めた。冷たいのに温玉とちくわとカニかま」

「増<sup>ま</sup>えてるよ」

「うん。だって、元気出さなきゃ」

明るく言われて、蒼司ははつとした。まったく凹<sup>く</sup>んでいるようには見えないが、今朝の件で千夏なりにダメージを受けているのだろう。

先月から千夏の身の回りにイタズラが起こっていた。椅子<sup>いす</sup>の座面<sup>ざめん</sup>いっぱいにチョークでイタズラをされたり、体操服を袋ごと水に浸<sup>ひ</sup>けられたりしたことがある。たまたま千夏が被害に遭ったのかと思っただけ、通学用のバイクのタイヤに釘を刺されたり、昨日は下駄箱に、定規を使った文字で「死ね」と書かれた手紙が入っていた。

その犯人が今朝捕まった。下駄箱に手紙を入れているところを一年の女子に見られて現行犯だった。犯人は同じクラスの男子で、自分とも千夏ともまあまあ仲がいい。イタズラがあったあとも、そいつは自分たちと一緒に買い物に行ったり、バスケットの試合の応援にも来ていたし、スナック菓子やジュースで行われる打ち上げにも交<sup>ま</sup>じっていた。千夏は最近、彼にCDを貸していたし、昨日はテレビドラマの話で盛り上がった。

動機は、何でもできる千夏に対する嫉妬<sup>しと</sup>ということだ。

「カニかま奢<sup>せ</sup>るよ、千夏」

「ホント？ じゃ俺<sup>おれ</sup>が温玉奢<sup>せ</sup>る」

「意味ないじゃん。じゃあ替え玉の分を出すよ」

結局同じような値段になるが、少しでも千夏を励ましたかった。

さとみちる  
画／秀良子



# 日月星、 その後のふたり

「日月星、それからふたり」より

「好き」は、  
透明でとろりと温かくて、  
どんどん体から湧いてあふれてくる  
ものだった。

小椋実成は昼食を終えて、おおくわ山公園事務所の表に出た。外はからりと晴れている。冷たくてすがすがしい三月中旬の空気を胸いっぱい吸いこんでから、帽子をかぶりなおす。今日はストープ用の薪を割るのにもってこいのいい天気だ。春が近づいているのに、ここ数日は横殴りの雪続きで薪割りどころではなかった。しかも春に向けてのイベント計画やチラシ作成、ホームページ更新、それにマスコミ対応で事務所にこもりきりだったから、久しぶりの外仕事が楽しみだ。

実成は丸太を割って薪を山つくり、首に巻いたタオルで薄く浮いた汗をぬぐう。薪が山盛りになった木箱を抱えて、小さく鼻歌を歌いながら事務所のある旧小学校校舎に戻り、事務所を通りすぎて来園者用の休憩ルームに向かった。一步踏み出すたびに木の床が鈍く軋む。リズムをつけながら進むにつれ、目的の部屋から楽しい声が漏れ聞こえてきた。ドアについたガラス窓越しに部屋を覗くと、十人ほどの来園者が囲む黒い薪ストープが弱く燃えている。そろそろ薪を足さないといけない。

ストープの天板から伸びる煙突の向こう側に焦点を合わせて、実成は鼻歌をやめた。ハイカーやバーダーの熟年女性に挟まれた赤城の姿が半分見えている。赤系の洒落たチェックの長袖シャツ姿で、袖口が汚れないようにするためか腕まくりをしていた。トレッキングパンツに包まれた足を組んで、前のめり気味になりながら膝に置いたスケッチブックに熱心に何かを描いているようだった。集中して一点を見つめている姿は、艶のない黒髪そして一重で切れ長の目と相まって冷たく、近寄りがたく見える。けれど女性たちを声をかけられると、魔法が解けたように柔和で親しげな笑顔になる。そのギャップに実成はかつてとり

こになった。そして赤城のかつこよさや優秀さ、リーダーシップの裏側に隠れていた自己中心さに傷つけられた。

赤城を見るたび言葉を交わすたびに何度も苦痛はよみがえる。けれど実成は赤城の謝罪を十二月に受け入れることにした。実成は今年で二十六歳になる。いつまでも傷ついた少年のままではいられない。それに男子高校生の思慮に欠けるバカげた行動を、大人になった本人にしつこく責め続けても、自分が疲れるだけだ。

ふと赤城が手を止め、スケッチブックを椅子に残して、実成のいる入口の方へ歩きはじめた。見ていると気づかれたかとドキリとしたけれど、赤城はストーブのガラス扉の前にしゃがんで奥を覗きこんだだけだった。事故防止の柵を開け、ストーブの扉についている木製のつまみを回して、薪をいくつか中に放りこむ。ほればれするほど無駄のない自然な動作だった。

赤城はおおくわ山公園での事業が終わってからはほとんど毎週末プライベートでやってくる。土日のおおくわ山に赤城がいるのは実成にとつてもはや当たり前の光景だ。今更赤城に対して構えても仕方ないと大きく息を吸いこんで休憩ルームのドアを開ける。

「皆さん、こんにちは！ 薪の補充に来ました」

実成が部屋に入ると、女性たちが口々に挨拶を返してくれた。

赤城はストーブの扉を閉めて、立て膝からすつと身を起こし、はにかむような笑顔を実成に向けた。赤城は姿勢も体格もいいから、アウトドアウェアに身を包んでいるとまるでベテランの登山インストラクターか何かに見える。実成は赤城に小さく会釈をしてストーブに近づく。

「お疲れ。ちょうど今、薪が切れたんだ。ありがとう」

今日、赤城と言葉を交わすのは初めてだ。

赤城は実成の勤務時間中に私的な感情を押しつけるようなことはない。赤城が実成の巡回についてきて山で二人きりになると、さすがに実成は緊張するけれど、赤城はルールを破らない。ルールが定まれば実成は安心できる。仕事中、過去の赤城の記憶が実成を苦しめることがあっても、現在の赤城の言動に心を大きく乱されることはない。

「こちらこそ火の番ありがとうございます」

実成がストーブの燃え具合をチェックし、窓が少し開いているのを確認してから頭を下げると、赤城の顔にばあつと笑みが広がった。再会した頃より赤城の表情は明るく豊かになってきている。あの頃は面倒臭そうだったり居心地悪そうだったり何か言いたげに実成を見つめていたり、じつとりしたマイナスの表情が多かった。実成に謝って、今の実成が好きだと告白して、赤城の中で何かが吹っ切れたようだ。

じゃあ自分はどうかと実成は振り返る。赤城とかかわって「良い」方に変わっているのだろうか。謝罪を受け入れた自分は、赤城と前向きかつ恋愛方向の関係を築こうとしているのだろうか。ひどいことをされたら恨む感情は条件反射のように湧いてくるけれど、そろそろ底をついてきたのか、怒りで体が震えることはめっきり減った。

赤城の瞳に映っている自分に目を凝らそうとしたけれど、赤城の目はにこりと細められているせいで自分の表情は窺えなかつた。ならばと自分の心の中を探ろうとしても、赤城に対する感情はまだ混沌こんどんとしていて正確に把握できない。

幸せな結末なら自分も見てみたい。  
現実では叶わなかったそれを見たい。



end roll

木原音瀬

画 / 小椋ムク

「リバーズエンド」より

— take 1

カフェの隅の席を吉田が陣取ってそろそろ一時間。おかわりのコーヒーをテーブルに置いて、全く気づいていない。城崎悟はトレーを抱えたまま、ひよいとパソコンを覗きこんだ。画面は文字で隙間なく埋まっている。

「何書いてるの？ 小説？」

吉田が振り返った。額には気むずかしげな二本線の皺が浮かんでいる。

「いや。これはシナリオなんだ」

「シナリオ？」

「そう、映画用のシナリオ」

「ふーん」と相槌を打つと、悟は邪魔をせぬよう早々にカウンターに戻った。吉田が映画関係者なのは知っていたが、脚本も書くなんで初めて聞いた。このカフェでヒット作のもとが生まれるとしたら、何か凄くなくという傍観者の暢気な妄想とは裏腹にそれから三時間、吉田はパソコンの前で浪漫とはほど遠い苦悩の表情でうんうん唸っていた。

バイトを終えた悟が私服に着替えてカフェの裏口から路地へ出ると、頬にフツと涼しい風を感じた。心なしか肌寒く、背中がブルッと震える。やっぱ上着を持ってくればよかった。最近、昼間は暑くても、日が落ちるとびっくりするぐらい気温が下がる。何だかんだ言っても、やっぱ九月だ。道が狭いので自転車

を押しながら店の前の表通りに出ると、自動ドアから出てきた吉田とちよと鉢合わせた。

「吉田さん帰るの？」

幾分寂しくなりかけた頭を掻き、吉田は苦笑いする。

「けっこう粘ったんだけど、あまり進まなくて」

「大変そう」

吉田は「そうなんだよ」と肉付きのいい脇腹をポンと叩いた。

「次、十亀さんと一緒に撮る映画の脚本、こっちに丸投げされたんだ。何でもいって言うてくれるけど、その何でもいいってというのが困りものぞ。十亀さんは海外のでかい監督賞を受賞したばかりで注目されてるし、これでコケさせたらどう考えても俺の責任だよなって考えると、題材を選ぶだけでもプレッシャーが半端なくてさ」

吉田は「悟くんは愚痴っても仕方ないよね」とため息をついた。

悟の実家はラブホテルだった。中学生の頃、そのラブホテルを舞台にアダルトビデオを撮っていたのが吉田や十亀で、その頃からの付き合いだから知り合って十年以上になる。

撮影の舞台になったラブホテルはもうなくなっちゃってしまっただけで、悟は高校卒業後に専門学校へ行って調理師の免許をとり『自分の店を持つ』を目標に、夜は割烹で働き、昼間はアパートの近くにある個人経営のカフェでアルバイトをしている。割烹が休みの日は、昼間のバイトを夜まで延長することもある。働きづめだが、人と会う仕事は好きなので楽しい。

カフェはモーニングやランチもやっているので、吉田だけではなく十亀もよく顔を出す。類が友を呼ぶ

のか、自然と映画に関係する人が集まる場所になっている。

「色々な話を考えて、ちよととずつ書き出してみるんだけどどれも今ひとつ嵌まらなくてさ。もう一回、根本から考えなおした方がいいのかもなあ」

悩める男は独り言のように呟く。

「俺、笑える映画が好きなんだけど、コメディっぽいのかどう？」

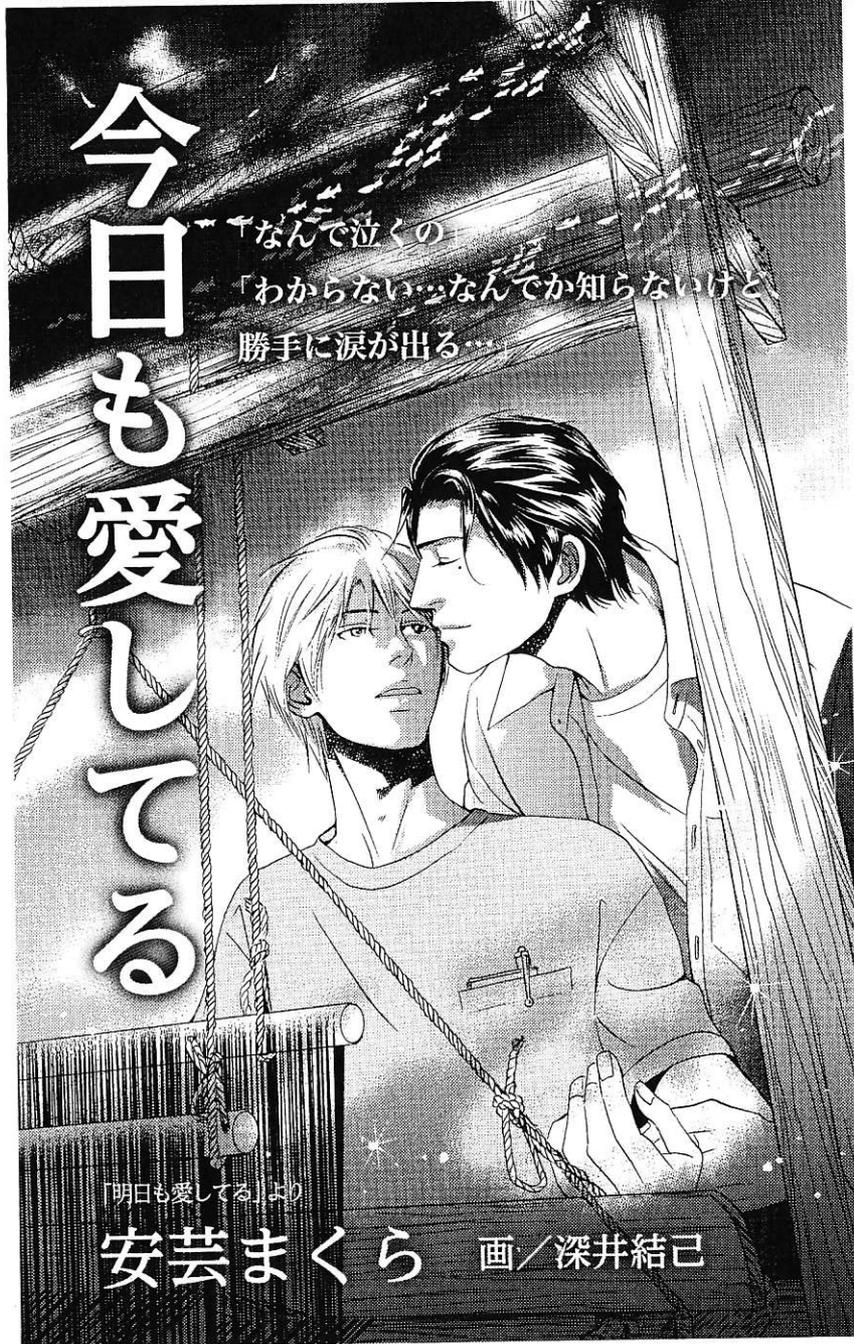
吉田は「コ、コメディか……」と更に困った表情になってしまった。そういえば「新作ができたから」と十亀や吉田から映画の招待券をよくもらうが、二人の撮った映画でコメディは今までなかった。あまり好きじゃないのかもしれない。それなら……。

「じゃあさ、十亀さんをモデルにして映画を撮ってみるのとかどう？ 小説なんかだと、自分の自伝みたいなを書く人がいるじゃん、あんな感じでさ。十亀さんは外国で賞をもらったんだから、そこに至るまでの半生！ みたいな映画があっても面白そうな気がするんだけど」

吉田は腕組みをし、俯き加減に黙りこんだ。何か素人が馬鹿なこと言っちゃったかなと悟が不安になっ

ていると「それ、いいかも」と顔を上げた。

「自伝的映画っていうと大げさだけど、十亀さんはちよと聞いただけでも色々な逸話を持つてるから、そういうのを膨らませたら、いい脚本ができそうな気がしてきた」



「なんで泣くの  
「わからない…なんでか知らないけど  
勝手に涙が出る…」

# 今日も愛してる

「明日も愛してる」より

安芸まくら 画/深井結己

目が覚めて、とまどっている波瀬權へ

なぜ知らない家にいるのかと怪しんでいるだろうな。

でもここはおまえの家だ。

たとえおまえの家でなくても、

このファイルが枕元にあるなら、おまえの家と違ってかまわない。

誰かのたちの悪い冗談じゃない。この字を見ればわかるだろ。

これを書いたのはおまえ自身だ。

今のおまえよりは多少はつきりしている昔のおまえだ。

おまえはしっかり物を考えているつもりでも、

なぜ自分がここにいるのかわからないし、昨日のことも曖昧だ。その理由は――、

おまえが、10年前事故に遭って、頭に負った怪我で、

前向き健忘という記憶障害になったからだ。

ほんの数分前のことを忘れてしまい、新しい記憶を蓄積できない。

今のおまえの記憶の容量は、13 分間。

長年使いこまれてきたびれたブルーのファイル、權の手書きの文字が並ぶ一ページ目、鉛筆で書きこまれていた記憶の容量「13」の数字を、津田悠児は紙を破らないように気をつけながら消しゴムで消した。新しく「12」と書きこむ。

この前の定期検診の結果だ。担当医が、中が見えないコップを三つ、權の目の前で伏せる。そしてキャンディーを取り出し、ここに入れておくねと言って、一番左端の伏せたコップの中に入れる。シャッフルはしない。十三分間、權に思い出話をさせて、何歳くらいまでの記憶をキープできているか確かめる。十三分後、キャンディーはどこにあるでしょう、と担当医が聞く。權は当てられなかった。十二分で当てられて、キャンディーをもらっていたが、さほどうれしそうでもなかった。

前向き健忘はじりじりと進行し、權の現在の記憶時間は十二分、逆向き健忘によって過去の記憶は失われ、今は十七歳くらいまでの記憶しかない。

驚異的に持ちこたえている、と担当医は言っていた。

『これからはなにを見聞きしても、分後には忘れるから気をつけろ』

ファイルの手書き文字の空欄に、また鉛筆で12と書きこんでから、こうやって厳密に時間をカウントすることに意味があるのだろうか、と悠児は考えた。

毎朝、十七歳だと思つて目覚めてくる彼に、新しいことは十二分しか覚えていられないという衝撃を味

あわせて傷つけてまで、記憶にしがみつくなければならぬのか。

なんのために…？ 一瞬本気でわからなくなり、悠児は苦笑する。

俺のことを少しでも長い間、覚えておいてもらうためだった。

現在のおまえの年齢は、37 歳

今日は、2010年9月22日

昨日の日付を消して、今日の日付を書きこむ。

閉じたブルーのファイルをサイドボードに置き、悠児は傍らのベッドを眺めやる。

天井を覆う一面の青の下で、權は眠っている。彼が鶴の恩返しよろしく身を削つて織った精緻な海の織物には、早朝まだ日は射さず、暗い。水底に吸いこまれそうさ。

頭上のほの暗い海の青から逃げるように、ベッドの白いシートに目を落とす。

大柄な男二人が暴れてもいいサイズのものを、かつて二人で選んで買った。二年ほど前まではここでセックスばかりしていたものだが、最近はまだ二人で寝ることはない。

あの頃はまだ体を繋いでいないと、不安でたまらなかつた。

抱いているときは、いずれ彼を失うという焦燥と孤独から逃れられた。

少しでも覚えていてほしいとすがりつくように、彼のなかに自分を埋めていたのだ。